

京都市社会福祉審議会 第4回「ひきこもり支援の在り方検討専門分科会」次第

日時 令和2年6月12日（金）午後6時～
場所 中京区役所4階第1会議室

1 開会

2 議事

- (1) ひきこもり状況へのアートの介入可能性 社会資源としてのアートについて
- (2) ひきこもり支援に係る社会資源及びネットワークについて
- (3) 京都市におけるひきこもり支援に係る意見（京都市社会福祉審議会委員照会）
とりまとめ結果について

3 閉会

<資料>

資料1 京都市社会福祉審議会 ひきこもり支援の在り方検討専門分科会委員名簿

資料2 京都市におけるひきこもり支援に係る意見（京都市社会福祉審議会委員照会）
とりまとめ結果について

資料3 ひきこもり支援に係る社会資源及びネットワーク（案）について

資料4 ひきこもり状況へのアートの介入可能性 社会資源としてのアート

京都市社会福祉審議会 ひきこもり支援の在り方検討専門分科会委員名簿

氏 名	団 体 及 び 役 職
井筒 隆夫	京都市民生児童委員連盟副会長
宇川 征宏	京都市中部障害者地域生活支援センター にしじんセンター長
大澤 彰久	京都市P T A連絡協議会副会長
◎岡田 まり	立命館大学教授
小野 恵以子	京都市社会福祉協議会生活支援部担当部長
○源野 勝敏	京都市地域包括支援センター・在宅介護支援センター 連絡協議会会長
小谷 裕実	京都教育大学教授
中川 眞	大阪市立大学特任教授
松山 廉	京都市ユースサービス協会事務局次長
三木 秀樹	京都府医師会理事

(五十音順, 敬称略, ◎は分科会長, ○は分科会長職務代理者)

京都市におけるひきこもり支援に係る意見（京都市社会福祉審議会委員照会） とりまとめ結果について

1 意見照会の目的

本専門分科会でとりまとめた中間報告提出に合わせて、今後の議論及び意見具申案のとりまとめに当たり、書面により、京都市社会福祉審議会委員からひきこもり支援の在り方に係る意見を聴取したものの。

2 意見照会期間

令和2年3月25日（水）～3月31日（火）

3 主な意見

(1) 相談窓口について

- ・ 本人にとっては窓口まで出向き相談することも、重荷になることも想定されるため、インターネットの掲示板やSNSの支援も必要なのではないか。
- ・ 窓口を一つにすると個別性が薄れ、実効性のある対応ができなくなるのではないか。
- ・ 既存の様々な窓口相談ステッカー等を出して、どこでも、誰からでも相談を受けられるようにしてはどうか。
- ・ ひきこもる人にとって、まず必要な支援とは、社会に引き出したり、押し出したりではなく、「受けとめ寺」になることであるため、相談窓口は「相談の方針」をしっかり持ってもらいたい。まずは傾聴して、安心を提供する必要がある。
- ・ 事例の蓄積・分析、支援手法やノウハウの共有、相談窓口の積極的な周知等により、地域全体の「受け止め」「支える」力の向上につながっていくのではないか。

(2) 支援の実施、受け皿等について

- ・ 犯罪被害がきっかけのひきこもりも想定されるため、犯罪被害者支援センターや、男女共同参画センター等との連携も必要なのではないか。
- ・ 「扉を開ける」システム作りは社会（行政）の仕事である。「ひきこもりを脱出できた人」の成功例を調査し、ひきこもり経験者もスタッフに入ってもらい、いくつかの解決パターンを示せば良いのではないか。
- ・ 世帯が抱える課題は複合化、複雑化していることが多く、課題が埋没しやすい。情報の共有がしにくく、支援の受け皿は圧倒的に不足している。

(3) その他

- ・ 目指すべき姿として、「ひきこもりを家族だけの問題とせず…」とあるが、本人が一番重要であるということを念頭に進めていただきたい。
- ・ ひきこもる人を取り巻く地域住民や世帯の支援者が、安心して支援の輪に入れるようにしていただきたい。

ひきこもり支援に係る社会資源及びネットワークについて

1 ひきこもり支援に係る社会資源について

これまで、当専門分科会では、行政を中心に据えた新たな支援の仕組みについて議論してきたが、ひきこもりを家族だけの問題とせず、社会全体の問題として捉え、地域や社会全体で支えていくためには、行政による支援に留まらない社会資源が必要不可欠である。

(1) 現状及び課題

別紙「ひきこもり支援に係る社会資源の分布」から、以下のとおり現状及び課題を読み取ることができる。

ア 見守り・相談・家族支援（家族交流会・学習会）

子どもは学校などの所属先を通じて、相談などの支援につながりやすく、つながり先である社会資源としても、行政が関わるものを中心に、子ども・子育て世帯を対象とした相談事業が充実している。相談事業以外では、実施主体及び対象となる年齢層による大きな差は見られない。

イ 居場所

社会参加の第一歩としての機能を持つ居場所については、支援対象者の年齢層によって差が見られる。

子どもについては、遊びを通じ成長を支援する児童館のほか、子ども食堂や学習支援を行う施設が身近な地域にあり、子どもを対象とした居場所としての役割を担っている。

若者を対象とした居場所は、公的に青少年活動センターがあり、大学等に所属がある場合には所属先が居場所となることも考えられる。

しかしながら、8050問題の顕在化や、内閣府の調査結果（参考資料2）から、壮年期のひきこもりの推計値が若者よりも多いことが判明し、壮年期のひきこもりについて、社会的にも関心が高まっている状況であるにもかかわらず、壮年期を対象とした居場所が少ない（又は把握できていない）という課題がある。

加えて、20歳代までの早い段階でひきこもり状態になり、本来積むべき社会経験が積めないまま壮年期を迎えた人が30%にのぼっており、壮年期のひきこもり支援においては、とりわけ本格的な社会参加の前段階の支援に対するニーズが高いことが想定される。

ウ 就学・就労

子どもに対する学習支援などの就学支援、若者・壮年に対する就労に向けた社会資源は、行政が関わるものを中心に充実しているため、ひきこもりに特化した新たな社会資源を開発する必要性は低い。

エ ウ以外の社会参加

社会参加の形態は多様であり、選択肢として数多くあることが望まれるが、ウ以外の社会参加の場として把握できている社会資源や、ウへの試行段階の社会参加の場が少ない。

(2) 今後の方向性（案）

(1)から、今後拡充する必要があると考えられる社会資源は、「壮年期の居場所」及び「年齢を問わず、就学・就労以外の社会参加を目指すための支援」であり、具体的には以下のような取組が想定される。

- ① 未把握の社会資源の掘り起こし
- ② 既存の社会資源による支援対象年齢の拡大（活性化）
- ③ 壮年期の支援に特化した新たな居場所事業の立上げ
- ④ アートやスポーツを含めた社会参加に係る事業の立上げ（社会資源の開発）
- ⑤ 既存の居場所等に当事者がスタッフとして参画可能にする仕組みの構築
- ⑥ ボランティア活動や地域活動とのマッチング機能の充実

行政の役割としては、①～⑤を推進するための立上げ支援となるような新たな補助金制度創設や運営支援となる相談機能の創設及び⑥を推進するための情報発信等による地域におけるひきこもりへの正しい理解・受容の促進など、有効な後方支援を実施することが考えられる。

（参考）本市のひきこもり支援に係る既存の補助金制度

- ・ ころこのサポート地域活動助成事業（平成24年度～）
ころこの不安定で障害が背景にあると考えられるものの、自身の障害が受容できないために障害福祉サービスの利用が困難な者及びひきこもりの状態にあるもの並びにその家族等を対象に、地域で適切かつ効果的な支援活動を実施する法人に対し、その経費の一部を補助するもの
- ・ NPO等民間団体の子ども・若者支援促進事業補助金（令和元年度）
ニート、ひきこもり、不登校等の社会生活を円滑に営むうえで困難を有する子ども・若者を支援するNPO等の民間団体が行う事業に対し、その経費の一部を補助するもの

2 ひきこもり支援ネットワークについて

(1) 現状及び課題

平成30年度に実施した、子ども・若者のひきこもり支援等に係る関係団体ヒアリング等から、本市のひきこもり支援ネットワークについては、以下のような現状及び課題があることが分かっている。

- ア 支援機関同士の横のつながりが薄い。
- イ 39歳以下のひきこもり支援ネットワークとしては、子ども・若者支援地域協議会が存在するが、40歳以上のひきこもりを対象とした支援ネットワークが存在しない。
- ウ ひきこもり支援を行うNPO等の団体と公的機関、医療機関との連携が弱い。
- エ 40歳以上を超えてつながれるネットワークや就労体験先が必要。

(2) 今後の方向性（案）

ア ひきこもり支援ネットワークの役割

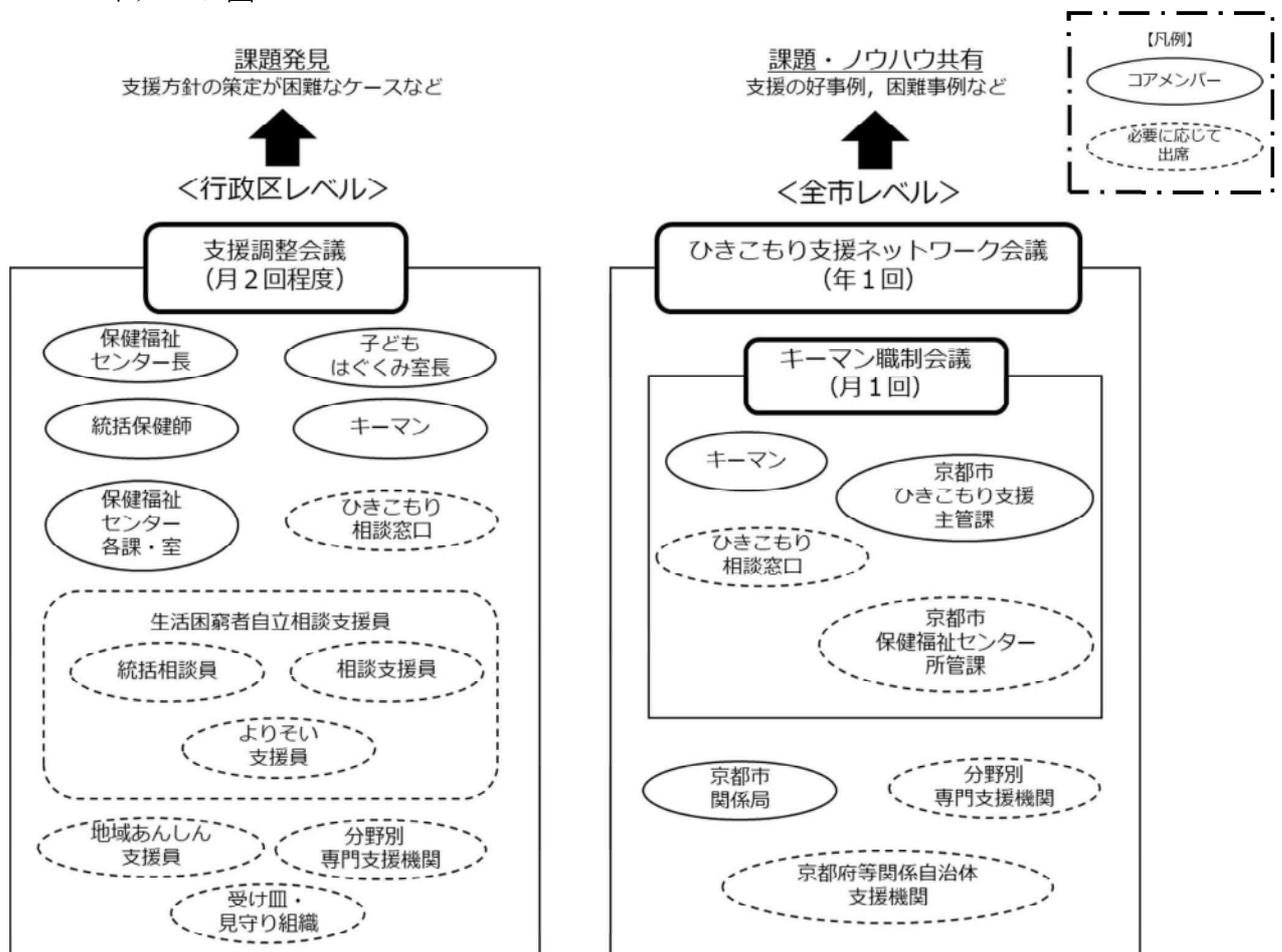
新たに設ける次の各会議において、各支援機関のひきこもり支援における役割の認識及び共有を行うとともに、事例検討等による支援スキルの向上及び課題の認識・共有・対応策の検討を行うことを通じて、支援機関同士の相互理解を深め、円滑な協力関係の構築及びソーシャルサポート（支え合い）の場としての役割を担う。

イ ひきこもり支援ネットワークの構成

次の各会議をひきこもり支援ネットワークに位置付ける。

- 行政区レベル 支援調整会議【月2回程度】
 個別ケースの支援方針の策定及び支援の役割分担並びに支援の進捗報告等を行う。
 個別ケースの支援を通じて支援者の関係を深める効果も期待できる。
- 全市レベル（通常） 各区役所・支所キーマンによる職制会議【月1回】
 支援調整会議の結果として抽出された課題（困難事例）やノウハウ（好事例）を共有する。
 全市の支援水準の向上に資する取組や全市的課題を共有し、関係機関の情報を広げていく。
- 全市レベル（拡大版） ひきこもり支援ネットワーク会議【年1回】
 毎月開催するキーマンによる職制会議のうち、年1回、幅広い分野から関係機関等も参画し、キーマン職制会議からの課題の聴取や各関係機関からの課題解決策のフィードバック及び専門家によるスーパーバイズの間とする。

<イメージ図>



ひきこもり支援に係る社会資源の分布

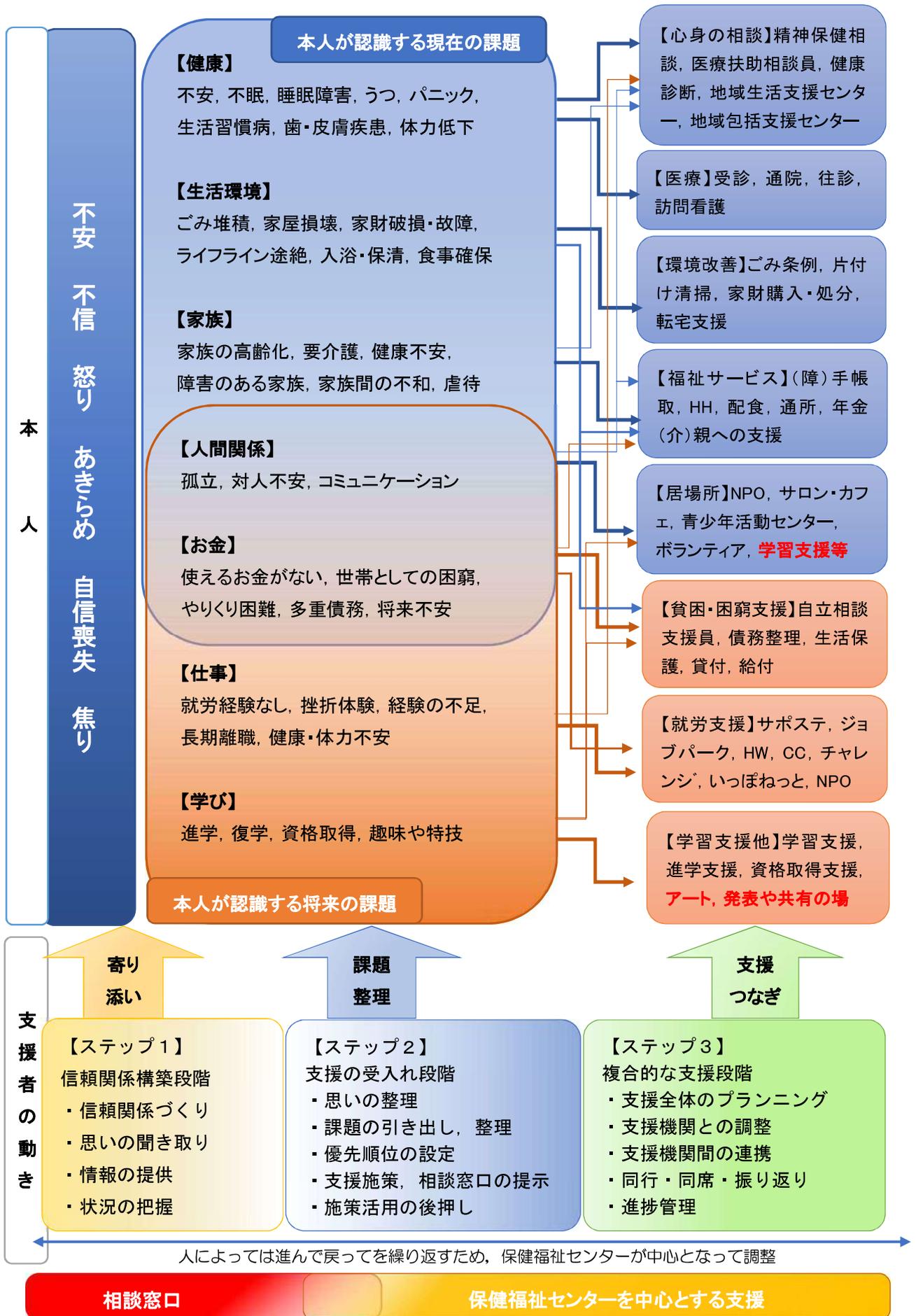
別紙

実施主体	他者からの働きかけ ・家族支援	生活基盤の立直し 個人的支援段階	社会的参加への準備 中間的・過渡的な 集団との再会段階	主体的な社会参加 社会的参加の試行段階
	出会い・評価段階			
行政等 (委託事業 含む。)	○ 見守り ・ 全 保健福祉センター各課・室 ケースワーカー 14区役所・支所			
	○ 相談 ・ 全 保健福祉センター各課・室 14区役所・支所 ・ 全 障害者地域生活支援センター 15箇所 ・ 若 青少年活動センター(13~30歳) 7箇所 ・ 全 高齢サポート(地域包括支援センター) 61箇所 ・ 子 こども相談センターパトナ 1箇所		・ 若 壮 ところの健康増進センター 1箇所 ・ 若 壮 発達障害者支援センター 1箇所 ・ 子 児童福祉センター 2箇所 ・ 子 児童館 130箇所 ・ 子 こどもみらい館 1箇所	
	○ 家族交流会・学習会 ・ 全 保健福祉センター 14区役所・支所		・ 若 壮 ところの健康増進センター 1箇所	
		○ 公的制度・施策 ・ 全 生活保護 ・ 若 壮 障害年金 ・ 全 各種医療制度 ・ 若 壮 児童扶養手当	・ 全 生活困窮者自立支援事業 ・ 全 障害者総合支援法・児童福祉法に基づくサービス ・ 若 壮 保育利用 ・ 若 壮 ファミリーサポート ・ 壮 介護保険法に基づくサービス	
		○ 伴走型支援 ・ 全 よりそい支援員 ・ 全 地域あんしん支援員	○ 居場所 ・ 子 こどもみらい館 1箇所 ・ 若 青少年活動センター(13~30歳) 7箇所 ・ 若 壮 ところのふれあい交流サロン 13箇所	・ 子 児童館 130箇所
			○ 学習支援 ・ 子 生活保護世帯等生活困窮世帯の子どもに対する 学習支援事業 18箇所 ・ 子 児童館 45箇所	
			○ 就労相談 ・ 若 壮 就労意欲喚起等支援(キャリアカウンセラー) ・ 若 壮 生活保護受給者等就労自立促進事業 ・ 若 壮 障害者就業・生活支援センター等 ・ 若 壮 ひとり親家庭支援センター(ゆめあす) ・ 若 壮 若者サポートステーション(~49歳) 1箇所 ・ 若 壮 ハローワーク 4箇所 ・ 若 壮 ジョブパーク 1箇所	
			○ 中間的就労 ・ 若 壮 チャレンジ就労	○ 福祉的就労 ・ 若 壮 就労移行支援 ・ 若 壮 就労継続支援 (A型, B型事業所)
				○ 社会的参加 ※60歳以上 ・ シルバー人材センター ・ すこやかクラブ(老人 クラブ)
	専門機関	○ 相談 ・ 子 学校 ・ 若 大学 ・ 全 医療機関		
NPO等	○ 家族交流会・学習会 12団体 (全2, 子6, 子若2, 若1, 若壮1)	○ ピアサポート, ピア交流会 6団体 (全4, 子若2)		
		○ 居場所 ・ サロン, カフェ等 (全12, 子若4, 若壮1, 壮1) ・ アート 5団体 (全5) ・ スポーツ 1団体 (子1) ・ 子 子ども食堂, 学習支援等 約80箇所		
		○ 子 フリースクール 3団体	○ 就労相談 2団体 (若壮2)	○ ボランティア活動参加 2団体 (全1, 若1)
		○ 就労体験 16団体 (若4, 若壮12)		
地域	○ 見守り ・ 全 民生児童委員協議会 ・ 全 社会福祉協議会 ・ 全 自治会, 町内会 ・ 子 PTA			
		○ 全 地域活動参加		
		ひきこもりの正しい理解・受容に向けた情報発信		
家族		見守り, ひきこもりの正しい理解, 医療機関受診勧奨		

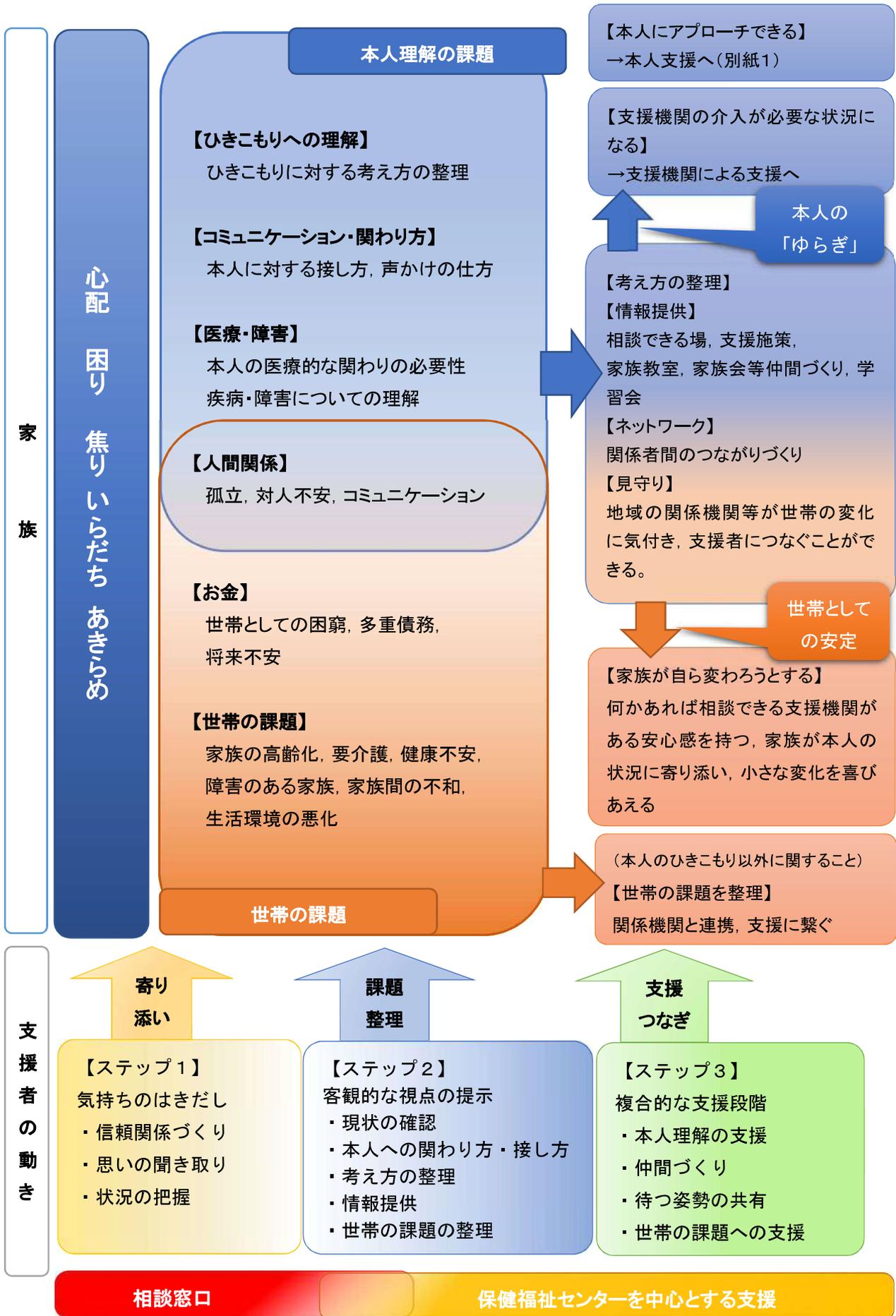
高齢サポート(地域包括支援センター)は、支援対象としている高齢者から、ひきこもっている家族についての相談を受けることがあるため、ひきこもり当事者としては「全年齢」として記載している。

【凡例】
白抜き文字は、それぞれの支援対象となるひきこもり当事者の年齢層を表わす。
全:全年齢
子:子ども(概ね18歳まで)
若:若者(概ね18~39歳)
壮:壮年期(概ね40~64歳)

ひきこもる人への支援のイメージ(本人支援)



ひきこもる人への支援のイメージ(家族支援)



ひきこもり等の支援の現状と課題について

1 ひきこもり状態の方の推計と本市における相談状況

本市のひきこもり状態の方の推計値に対し、本市のひきこもり地域支援センター及び子ども・若者総合相談窓口に寄せられるひきこもりの相談件数は1.7%程度となっており、地域の中には、初期段階のものから深刻化しているものも含め、多くの支援ニーズが潜在化していると考えられる。

<参考1>ひきこもり状態の方の推計（※1）

	15～39歳	40～64歳	合計
全国（※2）	54.1万人	61.3万人	115.4万人
【参考】京都市（※3）	6.6千人	6.9千人	13.5千人

※1 狭義のひきこもり（家から出ない、近所のコンビニ等には出かけるが普段は家にいる。）及び準ひきこもり（趣味に関する用事の時だけ外出するが普段は家にいる。）の状態が6箇月以上続いている方の合計値（推計）

※2 15～39歳：（内閣府：若者の生活に関する調査報告書（平成28年9月））

40～64歳：（内閣府：生活状況に関する調査報告書（平成31年3月））

※3 全国の推計値に基づき、本市の各年代の推計人口から算出

<参考2>本市におけるひきこもり相談等の現状

○ ひきこもりの相談件数（平成30年度）

機 関	実相談件数	
こころの健康増進センター（ひきこもり地域支援センター）	31件	233件
中央青少年活動センター （ひきこもり地域支援センター+子ども・若者総合相談窓口）	191件	
こども相談センターパトナ（子ども・若者総合相談窓口）	11件	
地域包括支援センター	307件（※）	

※ 地域包括支援センターは、高齢者への支援を通じて把握した「8050」問題を抱える世帯数を計上

○ ひきこもりの支援件数（平成30年度：各機関の申立数）

機 関	支援件数
保健福祉センター（※1）	435件
民生児童委員	82件
地域包括支援センター	73件
支援コーディネーター	66件
障害者地域生活支援センター	54件
地域あんしん支援員	58世帯
生活困窮者自立支援	28世帯
若者サポートステーション	18件
NPO等（※2）	約510件
青少年活動センター	10件

※1. 保健福祉センターは相談件数を含む。

※2. 支援コーディネーターからの繋ぎ12件を含む。

<参考3>40歳～64歳の方がひきこもりの状態になった年齢

～14歳	15～ 19歳	20～ 24歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50～ 54歳	55～ 59歳	60～ 64歳	無回答
-	2.1%	12.8%	14.9%	6.4%	2.1%	12.8%	8.5%	8.5%	10.6%	17.0%	4.3%

※ 内閣府：生活状況に関する調査報告書（平成31年3月）より

<参考4>40歳～64歳の方がひきこもりの状態になったきっかけ（上位6位：複数回答可）

きっかけ		割合	きっかけ		割合
1	退職したこと	36.2%	4	職場になじめなかったこと	19.1%
2	人間関係がうまくいかなかったこと	21.3%	5	就職活動がうまくいかなかったこと	6.4%
2	病気	21.3%	6	高校生時の不登校	4.3%

※ 内閣府：生活状況に関する調査報告書（平成31年3月）より

2 ひきこもり支援の現状と課題

ひきこもり支援は、それぞれの支援機関がそれぞれ限られた体制の中で、可能な限りの対応を行っている状況にとどまっており、様々な課題を抱えている。

※ 詳細は別紙1参照

3 ひきこもり支援の在り方に係る論点と議論の方向性

上記を踏まえ、別紙2のとおり、本市におけるひきこもり支援の在り方の検討に係る論点を「支援の流れ」の中で整理するとともに、それぞれ議論の方向性に沿って意見交換を行いたい。



ひきこもり状況へのアートの介入可能性 社会資源としてのアート

ひきこもり支援の在り方検討専門分科会 中川眞 2020/06/12

みずのき美術館「ayubune」プロジェクト

- 所在：京都府亀岡市
- 組織：障害者支援施設みずのきが母体
- 目的：障害者アートを社会につなげる
- コーディネーター：奥山理子。3週間かけて、一艘の鮎を釣るための船を廃材などで復元する公開制作と、そのプロセスを紹介する展覧会。
- 舟大工：ダグラス・ブルックス（米）
- 参加者：ひきこもり自助グループ7名（2014）
- 効果：施設の支援職員（1名）、ボランティア（2）、就職・結婚（1）、グループの運営補助（2）、不明（2）

アートが福祉的な領域や、アートに馴染みがないコミュニティに入っていく時に必ず葛藤が生じるものです。それをどのように言語化し、態度として共有していくかということ、みずのき美術館や私自身のプロジェクトが実験台となって試み続けています。（奥山）

アリスの広場 「ゆったりアーツ」 & 「ひきこ森」

- 所在：群馬県前橋市
- 組織：NPO法人 ぐんま若者応援ネット アリスの広場
- 目的：不登校やひきこもりの若者の居場所を提供
- 代表：佐藤真人（中学から6年間不登校・ひきこもりの当事者）
- コーディネーター：滝沢達史。2016年からアリスの広場の美術部門担当。アーツ前橋の休館日の美術館に出かける「ゆったりアーツ」や森を散歩する「ひきこ森」などで若者の外出を支援
- ボランティア：学生から元当事者の先輩など
- 参加者：5～8名（継続は平均4名）
- 効果：一部はハローワークへ、就職、結婚した人も

生きづらさを抱える人には、社会に合わせる努力よりも、世界の広がりを獲得した方が良いと思っている。（滝沢）

ひきこ森



ゆったりアーツ





Yさんの部屋
ボランテニアのYさんと過去に引きこもっていた
部屋を再現した。
彼女は自分を知るために大学で心理学を学び、
今はある程度自分を客観的に見れるようになったという。
昔の話を聞いているうちに、
最終的に当時の場所まで行ってみるようになった。



Tくんの化石
長年不登校だったT君。
「趣味もなく家では何もしていません。」
そう話していた彼に趣味があることを最近知った。
家には自分で見つけた化石が何百もあるそうだ。
しかし、ここにあるような立派なものは、
100個の石を割って出るか出ないかの確率らしい。
その姿は白い彼の腕からは想像できない。





紙芝居劇団 むすび

- 所在：大阪市西成区
- 組織：NPO法人ココルームが支援して2005年に発足
- 目的：元ホームレスなどの独居高齢者のコミュニティづくり
- コーディネーター：石橋友美
- 参加者：8名
- 効果：人生の終焉の場面での生きがいの獲得と、多くの友人に見送ってもらえること（孤独死の回避と看取りの共有）

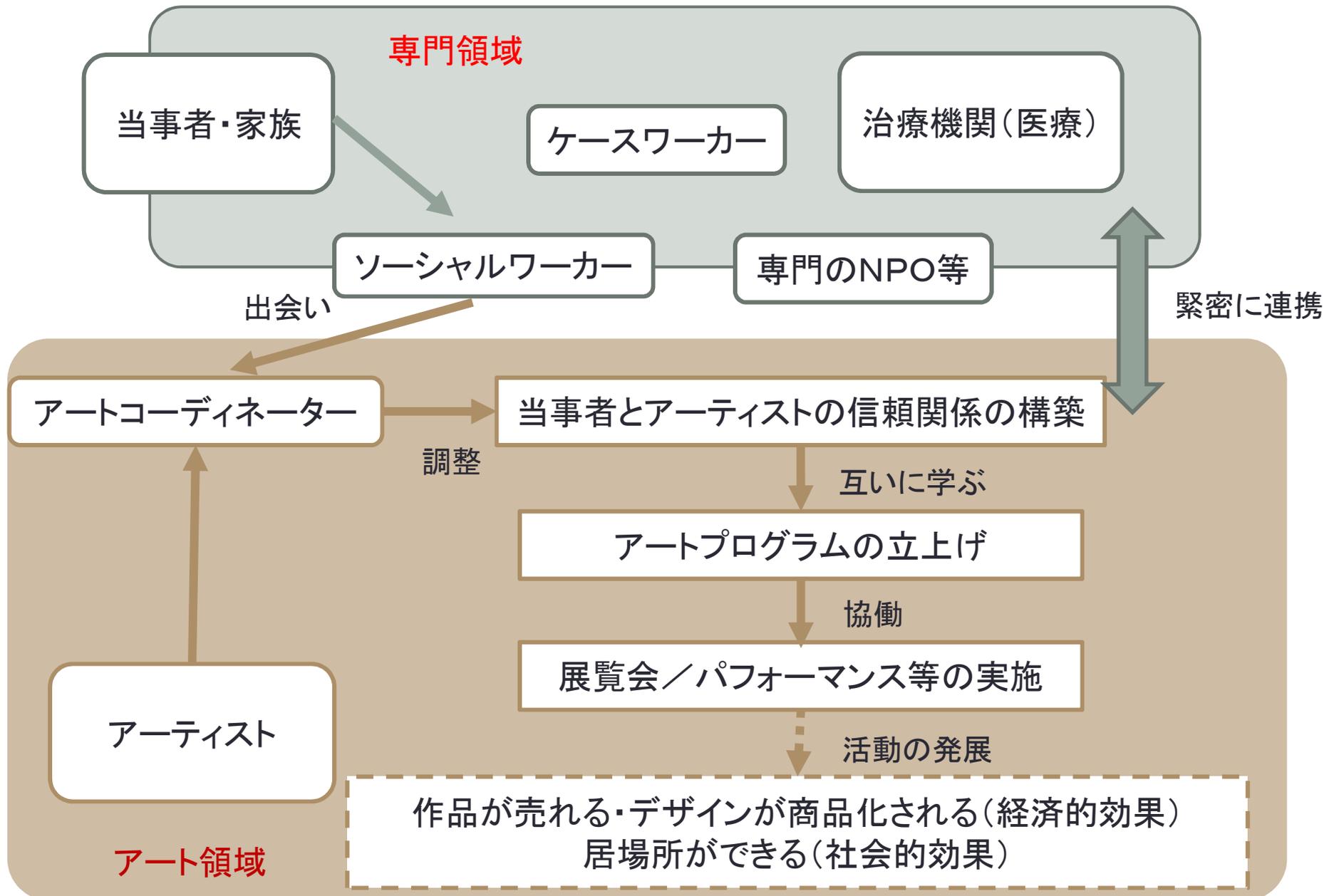
他人の安否を気遣うとともに、自分がここにいることも他人から認識されている。こんなささいなことが孤独感からアルコールやギャンブルに走り、部屋にひきこもり、挙げ句の果てに精神や身体を壊す、路上生活に戻るといった悪循環に陥る要素から彼らをまもってくれている。
(石橋)

楽友協会おきなわ 不登校児の居場所づくり

- 所在：沖縄県那覇市
- 組織：一般社団法人 楽友協会おきなわ
- 目的：クラシック音楽の普及 → 社会包摂型の音楽事業（特別支援クラス、こども食堂、不登校児の居場所）
- NPO kululu との協働：沖縄は不登校率が高い割に、彼らの居場所が少ない。貧困対策として県から委託を受けて事業運営。中学1年生～23歳までが在籍し、高校生が7割程度。6～7割は男子の利用者で、女子は行動範囲も広く自立のスピードが速い。学習支援はできても、芸術分野はどうしても専門外になってしまうので、その部分を補う目的で。交換日記では、ワークショップの反応は良い。

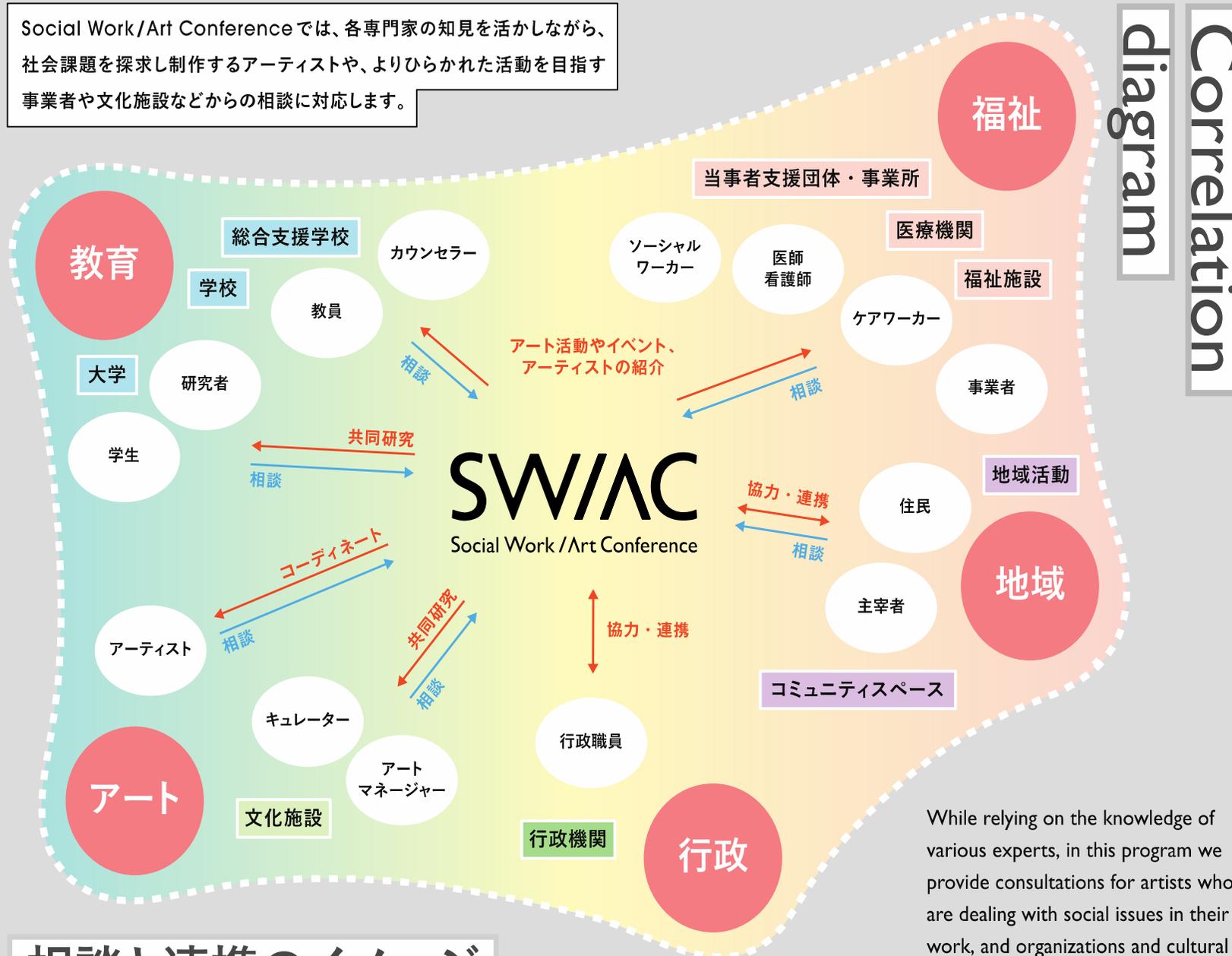
必ずしも子どもたちが不登校でなくなることを目的に活動を行っているのではない。彼ら彼女らが現状を卑下せず、今のまま自分たちのペースで頑張れば良いんだと感じてもらいたいし、そこに音楽が寄与出来るならば
(大城代表)

ひきこもり当事者とアートの関わり



Correlation diagram

Social Work/Art Conferenceでは、各専門家の知見を活かしながら、社会課題を探求し制作するアーティストや、よりひろかれた活動を目指す事業者や文化施設などからの相談に対応します。



Correlation
diagram

相談と連携のイメージ

While relying on the knowledge of various experts, in this program we provide consultations for artists who are dealing with social issues in their work, and organizations and cultural facilities that are hoping to expand their fields of activities.



